

シャルル・モーロンの「精神批評」(2)

越坂部 則 道

2

文学作品のなかに「深い自我」の痕跡を求める批評方法は、一般に、ヌーヴェル・クリティックの特徴のひとつとってよいだろう¹⁾。従来の古典的な評論が、作家の諸作品を、年代順にならべたり、同時代の社会と比較したりしながら、作品間の横の関連事項だけで体系化したのに対し、ヌーヴェル・クリティックは作品になんらかの方法で「深さ」を求め、そこから諸作品の関連性をみようとするのである。

こうした「深さ」の評論は、モーロンをも含めて、伝統的な方法を継承する批評家たちから、たびたび、批判の矛先をむけられた。その典型的な例として、レイモン・ピカール—Raymond PICARD—の小冊子がある²⁾。彼が行なったモーロン批判の要点は、本来神経症の治療のためにある精神分析を文学作品に適用している、という論旨に要約できるのだが、これに対し、モーロンは逆にピカールの文学への態度に疑問をさしはさむ。「文学を愛する私としては、意識的な意味作用に満足しようとした³⁾」というピカールのことばをとらえ、この意識というものだけに固執するピカールの文学観を皮相的な見方として退けるのである⁴⁾。両者の文学論の是非はともかくとして、この論争は、ピカールが意識を、一方のモーロンが無意識を自分の文学批評の原点に据える⁵⁾という、きわ立った相違を浮彫りにしたといえよう。

「無意識は文学創造のなかでひとつの役割を果たしえるのか？ もしそうであるとするならば、それをどのように定義し、どのように考察するのか？」⁶⁾ということばは、ピカールに反論したあと、モーロン自身が投げかけた問であ

る。これがそのまま精神批評の出発点でもあるように思われる。

彼の批評方法は、すでに述べたように、作品の裏にかくされた著者の無意識を明瞭に表出させるため、著者の意識的な思考を分解してしまう。これが意識というものを重視するピカールのモーロン批判だったのであるが、モーロンに限らず、ある程度の分解作業は、無意識を文学創造の根拠におく批評家たちの宿命的な行為でもある⁷⁾。

ところで、モーロンは精神批評の原点ともいべきこの無意識自体について明確な定義を下していない。これはおそらく彼がフロイト—FREUD—の思想を、精神批評において、そのまま借用しているからであろう。精神批評とは、言いかえるならば、無意識についての批評であるから、なによりもまず、モーロンの意図するこの無意識を分析しなければならないように思われる。

彼の理論上の師であったフロイトにとって、無意識は力動的な概念であり、たえず意識に働きかけを行ない、意識にむかって活動をしている⁸⁾。無意識に静止状態はありえないのである。このような無意識を彼は「欲動の代理」—le représentant de la pulsion—と名付け、そして欲動のエネルギーによって備給されている領域を無意識と解釈した。その激しい活動の結果、意識上に「無意識の派生物」—le rejeton de l'inconscient—が生みだされるようになる。この派生物とは神経症の症状をはじめとして、連想、幻想^{フアンタスム}⁹⁾などが含まれている。

ところで、無意識の備給エネルギーは人間の主体のいわば埒外にあり、無意識それ自体が主体の意志にかかわりなく活発なエネルギー活動をくり返すが、それでいて、なおかつ派生物という産物を生みながら、主体の意識にかかわってくるのである。もしここで人間の主体を「私」という文字に置きかえてみるならば、無意識は「私」と直接関係のない構造をもち、「私」と無縁なところで機能するので、「私」のなかに存在する「他者」ということになるのだろう。この無意識の独自性を表現するため、無意識とは何ものかの思考であるとフロイトは考えた。この何ものかは、むしろ、意識と明確に区別されなければならない。

「無意識は言語のように構造化されている」というのは、モーロンと同様に、フロイトの精神分析に忠実だった思想家、ジャック・ラカン—Jacques LACAN—の生涯にわたる座右の銘である¹⁰⁾。ラカンのこの基本思想はフロイトの無意識の概念（意識から遮断された無意識のエネルギー活動）を踏まえたうえで、さらにそれをもう一步押しすすめたものであるが、ことに無意識が言語構造をもっているという点に、彼の思想の特質的な発展をみることができる。

この無意識の言語は、ラカンのもうひとつの標語「無意識は他者の言^{ディスクール}表である」からもわかる通り、「私」が直接主語になりうるような性格の言語ではなく、いつも「他者」とのかかわりをもって成立する言語である。しかしこの「他者」をラカンの思想のなかで正確に位置づけるのは困難であろう。「他者」が意識や主体から遮蔽されたものと言いきることはできても、それが果たして無意識そのものであるのか、第三者的な性質をもった抽象的な「他者」なのか、それとも実際に存在している具体的な「他者」なのか、定かに指摘できないからである。ただ少なくとも、主体のなかに主体そのものの言語と別の言語をもった「他者」がいるということは、主体の分裂に他ならない、と断言することができよう。それは主体というものが内部において統一されていないとも解釈できるし、また主体とは異質の何ものかとの関係なしに存続しえないほど脆弱なものだという風にも解釈できる。ともあれ、このような主体の状態を考えるにつけ、ラカンのいう無意識の言語とは日常会話のような通常の言語というよりも、分裂した溝の橋渡しを目的とする、伝達手段としての言語、という役割が強いように思われる。意味されるものを明瞭に示すための言語ではなく、誰かに対して意味することを目的とした言語である¹¹⁾。

このようにラカンの無意識は、それが言語構造として把握されたとき、幻^{ファンタスム}想などに代表されるような欲望充足のための仮説状態を超えることができたのであるが、一方、モーロンの無意識の概念はラカンほど明確ではない。

もし読者が「無意識的思考」という表現にショックを受けたならば、なんらかの表象が比較され、連結され、グループ化されるという心的行為を私は「思考」と名付けてい

ると、了承していただきたい。この行為は無意識的であるし、それゆえまさに反省的な思考とは区別されるのである¹²⁾。

ここでいう「反省的思考」とは言語形態による反省行為をあらわし、また、「表象の比較、連結、グループ化」が行なわれるのは、モーロンの場合、イメージによってである。表象はふつう「言語表象」と「事物表象」とに区別されるが、無意識の領域を特徴づける表象として「事物表象」をとりあげたのはフロイトであり、モーロンもまた、それに沿って無意識系を解釈しているようだ。表象が能記との関連性を問われ、そして「言語表象」の問題が前面に出てくるのは、むしろソシュール—SAUSSURE—やラカン以後の言語学の分野においてである。モーロンは無意識の活動を「思考」と表現しながらも、言語構造とのあいだに一線を画しているのである。このことは次の文章においてさらに明瞭に示されるであろう。

無意識的思考の正常な産物を構成し、しかもあらゆる固有な表現を奪われる（それというも意識的思考が原則として自発的なことば、物まね、身ぶり、行動を支配するからである）前言語的な夢や幻想^{フアンタスム}はそれゆえに可能な出口を求めるのである¹³⁾。

幻想^{フアンタスム}が無意識の派生物であることは先に述べたが、この幻想^{フアンタスム}の水準においてさえ、モーロンにあっては、前言語的なのである。ラカンは無意識をなによりもまず言語構造として把握したが、モーロンは言語の獲得以前のものとして無意識を理解している、ということになる。

ところで、精神批評の対象は文学作品に限定されている。その文学作品を構成するのはいうまでもなく言語だけである。そうであるとするならば、モーロンの関心が前言語的な無意識の状態にとどまるということはない。彼の視点は無意識自体にあるわけではなく、無意識の傾向にある、とあってよいだろう。創造意識に言語形態を与え、文学作品を作りだすのは意識的な自我であり、この自我に影響をおよぼす無意識の力の分析が精神批評の目的といえよう。したがって、無意識の一般的な機能よりも、例えば「ラシーヌの無意識の傾向」

「マラルメの無意識の傾向」といった、無意識の具体的な産物とその発展が対象になる。ラカンの言語学に対し、同じ無意識から出発してモーロンが一種の発達心理学に赴いたのは以上のような理由によるものと思われる。

モーロンの著作でしばしば使用される無意識的人格という用語はこの個々の無意識的傾向の原型をあらわしている。すなわち、退行、口唇期、転移などといった無意識の過程を、作家の心的現象のなかに求め、そして作家別に類型化するのである。ラカンは一方で無意識を「他者」として捉え、そのため主体および自我と無意識とが密接なかかわりをもつようになったが、無意識的人格の方は、例えば先のラシーヌの個人的神話からもわかるように、多くの場合、必然的に父親や母親との関係によって捉えられる。人格にまで原型化された無意識の働きを分析するためには、無意識自体の機能を考察するときよりも、よりいっそうの具体的な内容が必要になるだろう。モーロンは欲望—le désir—や恐怖—la crainte—といった感情状態で心的行為を解釈することが多い。

深い想像力は…感覚とか、思い出とか、少しばかり感情にいろどられた観念とかを集めるわけではない。それは欲望あるいは恐怖の動き^{ムーブマン}を整理するのである¹⁴⁾。

幻想の水準においては、思考とは抽象的な関係ではなく、しばしば欲望と恐怖がいっばいに入りまじったイメージなのである¹⁵⁾。

モーロンが無意識のいわば潜在内容を欲望や恐怖ということばであらわすとき、同じ精神分析の影響を受けた思想家、ガストン・バシュラール—Gaston BACHELARD—の無意識の概念と、モーロンの意図する無意識とが大きく隔たるようになる。なによりもまずバシュラールは無意識を分析の対象にしない。無意識が夢という現象の源泉になっていることを認め、さらには、観念や概念などの抽象的なものから人間をみるのではなくて、無意識をむしろ人間らしさのあらわれであるとし、この無意識からの人間の再認識を追求するのであるが、それでいて、バシュラールは無意識そのものの分析を排斥する。逆にこの無意識それ自体を受け入れ、それによって、不安定な人間存在を根底からさ

さえようとするのだ。例えば「人間はゆりかごのなかで、限りない幸福にすっかり身をゆだねるが、そのゆりかごのゆれる幸福の無意識的な思い出」¹⁶⁾とバシュラールが言うとき、この無意識は人間の幸福の原点になっており、フロイトやモーロンの、性的に抑圧された無意識とはまったく異質である。バシュラールはこのように人間の無意識を人間の幸福の価値判断の基準にするのである。

無意識はつつがなく暮らしている、しあわせに暮らしていると、付け加えなければならぬ。それは幸福の空間に暮らしている。正常な無意識はいたる所でくつろぐことができる¹⁷⁾。

バシュラールは無意識を、心的現象におけるひとつのイメージと考える。心的現象という人間の深いたましいのなかで、例えば「空を飛ぶ行為」や「大地にしっかりと根を張る行為」がイメージ化され、それが人間の夢を支配するようになる。人は知的に事物を理解するのではなく、このイメージで事物に接近し、イメージで事物を考えるとということだ。したがって無意識のイメージは知性による分析の対象というよりも、感覚的な深い体験になるのであり、人間の意識的な行為や行動の基礎となるべき体験なのである。この無意識のイメージは、あまりにも人間の思考力に影響をおよぼすので、われわれの日常生活のみならず、科学的認識においてさえ、その影響力が認められると、彼に具体的に例証をあげつつ主張する¹⁸⁾。

イメージ化された無意識というバシュラールの考え方に対し、意識思考によってではなく夢や夢想やコンプレックスなどによって文学を語っている点について評価しながらも、バシュラールの無意識の概念があまりにフロイトの精神分析から逸脱しているため、モーロンは次のように彼を批判するのである。

(バシュラールにおいては) 夢の顕在内容がその潜在内容と、もはや区別されない。夢の仕事と夢の正確な過程は考慮されないのである。問題となる無意識はメカニズムも審級も含んでいない。そこには物語がなく、たんなる内省によって簡単に無意識が把握

されてしまう。人格のどの水準において、著者（バシュラールのこと）は分析を行なうのか？ あきらかに、科学的に定義された無意識の水準においてではない¹⁹⁾。

バシュラールに比較すると、たしかにモーロンはフロイトの無意識の概念を正確に継承しているようだ。それだからといって、バシュラールの思想は不正確であるというのではない。実際、精神分析に対するバシュラールの考えはモーロンと多少意を異にする。

精神分析が夢の飛行の肉欲的な性格を強調するとき、それですべてを語っているわけではないと感じなければならない。夢の飛行は、あらゆる心理学的象徴と同じように、さまざまな解釈、つまり情熱的な解釈、美的な解釈、合理的で客観的な解釈が必要である²⁰⁾。

『空間の詩学』—*La Poétique de l'Espace*—のなかで彼は以上の論旨をまとめあげ、精神分析学者は「肥料によって花を説明する」²¹⁾と簡潔に述べた。精神分析の評論は欲望や快感などの、人間のいわば裏面の性格から文学を解釈しすぎる、というのである。

この両者の立場の相違は無意識の概念の差に由来するのではないだろうか。バシュラールは『空と夢』—*L'Air et les Songes*—のなかで、飛行の夢の深さについて語るが、空を飛びたいという夢想は、備給エネルギーによる解釈をうけるまでもなく、なんらかの体験を通じて、人間に共通したものではないかと思われる。さらに「墜落する恐怖は原初的な恐怖である」²²⁾と彼は述べるが、墜落のイメージは飛行の夢のイメージよりいっそう深く、あらゆる人間に備わった基本的なイメージ体験であり、われわれの無意識のなかに、消すことのできない心的印象をきざみこむ。このようなイメージは、性的に抑圧された結果の、個人的無意識の産物と考えるよりは、人間に共通した集合無意識の産物と理解した方がよいだろう。いうまでもなく、これはユンク—JUNG—の無意識である。モーロンの無意識の概念はフロイトの理論によって成立するが、一方のバシュラールはユンクの立場に立脚して無意識を考察したということにな

る。先の引用文で、バシュラールは精神分析を懐疑的にとらえていたが、それは当然フロイトの精神分析のことであり、後に、彼が精神分析をすっかり離れ、新たに現象学に道を開くようになって、ユンクの考え方(例えばアニマとアニムス—Anima et Animus—など)には同調しつづけるのである。

結局バシュラールは夢に無意識の深いイメージの痕跡を見だし、「夢の経験と現実の経験のつながり」²³⁾を示しながら、人間存在の深さを語ろうとする。彼にとって、夢の経験的イメージはわれわれの実体であって、夢を夢見る人の実質的な生命と考え、夢に生のよろこびを認めるのである。例えば、飛行の夢をみたとき、夢の印象が夢見る人の存在全体の軽さによって構成され、次に、この存在の軽さがわれわれのなかの、それまでは知られなかった自由な運動を解放してしまう²⁴⁾、ということだ。このことは、モーロンと同様に、バシュラールもまた無意識を人間存在の根源とみなし、無意識によって人間を深さの尺度で推し量ろうとしていることの証左といえよう。ただモーロンの場合は、人間存在というよりも対象が文学作品に限定され、しかも、人間の価値という意味においていうならば、欲望や近親相姦など、いわば否定的な要素として無意識を追求する。喜劇作家の無意識的人格を例にあげるならば、それはあたかも近親相姦と近親憎悪のふたつの極に二分されるかの如くであり、そこに美的な側面などはいっさい含まれていないようである²⁵⁾。モーロンの無意識は、言いかえるならば、欲望に裏打ちされた無意識である。一方のバシュラールはいわば肯定的な要素として無意識を追求し、先にも述べたように、それは常に幸福な人間の存在根拠なのである。

ところでモーロンは、人格化されたこの欲望の無意識で、直接文学作品の分析を行なうのではない。もしそうであるならば、それは作品を媒介とした作家の精神分析にほかならない。

オイディプスは正常な感情発達の、ある水準に対応し、したがって幻想^{ファンタジー}の、ある構造作用に対応する。その役割、およびその副産物の役割は、普遍的な文学のなかで、とりわけ悲劇と喜劇のジャンルのなかで、証明すべきではないように私には思われる²⁶⁾。

これはオイディプス・コンプレックスが無意識的過程だから文学に直接適用されるべきでない、という意図でもってモーロンが述べたのではなく、オイディプス・コンプレックスの分析行為には、無意識的過程のなかでの、オイディプスの^{ファンタジー}幻想とそうでない^{ファンタジー}幻想との下位区分が伴う、という危険性を考慮した結果の、彼の慎重な態度の表明である。「とりわけ悲劇と喜劇のジャンルのなかで」と述べたのは、モリエール—MOLIERE—の作品のかさね合わせを行なったさい、モリエール個人の無意識的特徴よりは、平凡な輪郭（仲を裂かれた恋人同士、けちな父親、ずるがしこい奉公人など）の方しかあらわれなかったからである²⁷⁾。引用文が示したように、モーロンは、無意識に対し、予備的な分析を避ける。発達心理学のなかで無意識が関与する仮説（例えばオイディプス・コンプレックス）から、作家の無意識的人格を規定し、そして作品を分析するのではなく、逆の作業から、つまり作品の描写から無意識的人格へとすすむ。したがって無意識の予備分析をとっさい排除しようとするのである。

このとき、作品から一挙に無意識的人格へは至らない。その途中に介在するのが^{ファンタスム}幻想である。精神批評は作家の精神分析ではない、モーロンに言わしめた根拠がこの^{ファンタスム}幻想の概念であったように思われる。精神批評を一口で言ってしまうと、^{ファンタスム}幻想の分析、ということになるだろう。先に個人的神話といったのは、実のところ、この^{ファンタスム}幻想のことにほかならないのであり²⁸⁾、また無意識的人格を統括するのもこの^{ファンタスム}幻想である。「私が作家の個人的神話と名付けたものは、実際、作家の無意識的人格の構造を支配し、代表する彼の^{ファンタスム}幻想以外の何ものでもない²⁹⁾とモーロンは明言する。

もともと^{ファンタスム}幻想の概念を主張したのはフロイトであり、それが無意識の派生物であることはすでに書いた。この^{ファンタスム}幻想の性質と機能を詳細に考察したのがスーザン・アイザック—Susan ISAACS—で、モーロンは彼女の研究業績に基づき、精神批評に^{ファンタスム}幻想の概念を導入したといえよう。ところでここにひとつの問題が生じたのである。

フロイトは幻想を「phantasie」という単語であらわしたが、一般に英語では「phantasy」と表記する。この「phantasie」もしくは「phantasy」に相当する

フランス語の単語は、「phantaisie」という綴り字がないので、「fantaisie」となる。ところが「fantaisie」には気まぐれやとりとめのなさといった語感が強く、このため「phantasme」という単語を「phantaisie」の訳語に充てるようになった。この幻想の役割を大きく発展させたアイザックはここでひとつの主張を行なう。フロイトの提唱した幻想には意識された白昼夢や無意識的な原幻想などが含まれているが、彼女は、このうち、意識された幻想を「fantasy」と記し、それと区別して、意識されていない幻想を特に強調するときには「phantasy」と綴ったのである。アイザックの意図は幻想の構造のなかに心的表現をみようとすることとあり、「fantasy」の方を中心に幻想の機能を語っているようである³⁰⁾。モーロンは彼女の「fantasy」を「fantaisie」と仏訳し、同時に精神批評の用語として採用した。さらにこの「fantaisie」には彼女の「phantasy」の解釈も含まれているのである³¹⁾。また一方で、彼はフロイトから「phantasme」の概念を直接的に取り入れているのだ。こうして精神批評の著作には「fantaisie」と「phantasme」のふたつの幻想が併置されるようになった。

モーロンは「fantaisie」を次のように規定している。

ファンテジー
幻想ということばは、意識上に露出することができるとはいえ、原初の思考とか夢という意味、無意識の源泉や形成という意味に把握されなければならない³²⁾。

ファンテジー
幻想は欲望をあらわし、と同時に、間違いなく欲望の対象をもあらわす。それは主体と客体とのあいだの交換の最初の十字路であり、この十字路が自我になるだろう³³⁾。

ファンテジー
幻想と自我との関係についてはいずれ述べることになるが、ここでは少なくとも、ファンテジー幻想が無意識の形成物であり、欲望のあらわれである、という点に注目しておく。欲望と密接な関係をもちつつ、意識への露出に自己表出を求めファンテジーる幻想は、いってみれば、欲望の充足体験のひとつであり、防衛機制のひとつの形態である。ところがこのような性質と機能は「fantaisie」に特有なものではなく、フロイトの「phantasme」の性質と機能にあてはまるのである。ファンタスム幻想もまたたえず新しい素材に欲望の表出を求めながら、防衛機制によって多少歪

された想像上の脚本を作りつづける。モーロンの作品にあらわれる「fantaisie」曲と「phantasme」の役割に具体的な相違はなく、またその性格にも明確な差異は認められない。本論の冒頭で示した精神批評の規準では「ファンタジー・イマジナティブ想像的な幻想」という用語が使用されているが、ここからもわかる通り、モーロンはたびたび「fantaisie」に「想像的」—imaginative—という形容詞を付ける。これは、文学作品の源泉になるファンタジー幻想と、白昼夢や気まぐれな空想としてのファンタジー幻想とを、同じファンタジー幻想のなかで区別するところから生じた彼の意図的な行為であろう。もし「fantaisie」と「phantasme」のあいだに接点を見いだすことができるとするならば、この「想像的幻想」という表現においてである³⁴⁾。幻想は精神分析のなかで非常に広範な心的行為をあらわすが、精神批評の対象になる幻想は対文学作品という狭い範囲に限定され、このために「imaginative」という形容詞で「fantaisie」の性質が定められたとするなら、一方の「phantasme」は、精神分析における広い定義から離れ、はじめから精神批評の用語として、文学作品にみられる作者の幻想という意味で用いられてきたと考えられる。

モーロンの幻想が文学作品への適用範囲をこえないにしても、それがいわゆる妥協形成のひとつであるからには、正常な夢の機能とこの幻想の機能とが比較できるようになる。事実、彼はたびたび夢の概念と対比させながら作家の幻想を分析する。つまり無意識の欲望が抑圧され、この抑圧されたものへの回帰が、日常の睡眠時に夢としてあらわれるのに対し、同じ抑圧されたものが創造活動の行為中にあらわれると、それを幻想と呼ぶということである。無意識→日常生活の過程に夢があり、一方の幻想は無意識→文学作品の過程にあるという意味だ。先に精神批評が幻想の分析であるといったのは、ちょうど精神分析における「夢判断」と同じ行為を、この幻想に対して行なうからである。

フロイトは夢の顕在内容を分析して夢の潜在内容を解明しようとした。夢は同一の内容をもちながら、二つの表現形態をもつのである。顕在内容が夢見る人の表現であるなら、当然潜在内容は分析者の表現である。この夢の構造を、モーロンはそっくり幻想の構造に適用してゆく。

彼ら（喜劇の登場人物のこと）はおそらく一個ないし数個の幻想の顕在内容を形成するが、その幻想が、すっかり練りあげられた、無意識的幻想の意識的な面を、われわれに示さないだろうか？ 幻想の潜在内容は決定するのに時間がかかるのである³⁵⁾。

この引用文はモリエールの精神批評が満足な結果を得られなかったあとの、モーロンの反省を語った部分であるが、幻想に潜在内容を認め、また、登場人物の行動にその顕在内容を託していることがわかる。さらにいえば、モーロンという分析者にとって、文学作品は夜の夢と同じような対象物だったといえる。そして、その作品から著者の幻想の潜在内容を解釈するのである。ふつう夢の潜在内容は夢の思考と呼ばれ、記憶や転移など、イメージの動きによって構成されるが、幻想の潜在内容もまた、モーロン自身が無意識的思考と再三再四述べてきたように、幼年時代の記憶、印象、転移現象（特に母親、父親への多様な転移）といった表象による思考に基づいている。例えば『晩年のボードレー』—*Le dernier Baudelaire*—で示された幻想の潜在内容の翻訳（再婚した母親への依存、英雄的な自殺、母親の子殺しなど）はその典型であろう。幻想にふたつの表現形態をみようとしたのはモーロンの独創であったように思われるが、結局のところ、幻想という概念を著者とモーロンの接点として考えるなら、著者の言語によって幻想を表現したのが文学作品であり、モーロンの言語によって幻想を表現したのが精神批評ということになる。

1) ヌーヴェル・クリティック—*nouvelle critique*—ということばを狭義にとって、ジュネーブ学派（プーレ、ペガン、スタロバンスキー等）や精神分析的方法の一部の批評家（バンシュラール、リジャール、そしてモーロン）を、そこから除外することがある（『フランス文学史』、白水社）。その場合のヌーヴェル・クリティックとは、ソシュール、ヤコブソン、ラカン、バルト等をさすことになるだろう。しかし「ヌーヴォー・ロマン」—*nouveau roman*—ということばに対応して「ヌーヴェル・クリティック」と言う場合が多く、構造主義批評、テーマ批評、精神分析的批評、マルクス主義批評などをすべて総称して「ヌーヴェル・クリティック」と呼び、したがって、モーロンもそこに加えられるのが普通のようなのである（*Les Chemins actuels de la Critique*, 10/18, 1968）。

2) Raymond PICARD, *Nouvelle critique ou nouvelle imposture ?*, J.-J. Pau-

vert, 1965.

3) Ibid. p. 126.

4) Charles MAURON, *Le dernier Baudelaire*, p. 172.

5) MAURON, *Des Métaphores obsédantes au Mythe personnel*, p. 220.

“La psychocritique ne prétend étudier que l’aspect inconscient du texte.”

「精神批評はテキストの無意識的な面だけを考察しようとする」

6) *Le dernier Baudelaire*, p. 173.

7) 例えば、モーリス・ブランショ—Morice BLANCHOT—はバシュラールの『空間の詩学』を同様の主旨で論評している (*Vaste comme la Nuit*)。バシュラールは人間の無意識から、詩のイメージの深さを語るのであるが、ブランショによれば、「イメージは詩の秘密であり、詩の深さなので、詩のなかでイメージほど輝きを放っているものはない」(p. 692)にもかかわらず、それは「突然涌出するかのように言語から浮かびあがり」(p. 688), それゆえに、たとえイメージが輝き、振動するにしても、「それはイメージの振動であって」(p. 695), 詩の振動ではない、というのである。イメージはいわば唐突なものであり、ひとつの統一性をもった詩篇全体、著者が意識的に行なった詩篇全体の構成とイメージとは無関係である、というのがブランショの意見であった。この論旨を、ディエゲズ—DIEGUEZ—は「イメージが詩のすべてではない」(*L’Ecrivain et son Langage*, p. 233)とまとめあげ、バシュラールの批評方法に「点描画法」—le pointillisme—の名を与えた。ディエゲズにしたがうならば、あたかもモーロンが著者の意識的な思考による詩篇の構成を分解した上で、著者の無意識的人格を把握したように、バシュラールの研究したイメージの深さは、詩篇の統一性を素通りしたところに成立するものだったのである。

8) フロイトの無意識、および夢についての概念は、「フロイト著作集」, 人文書院, 『精神分析用語辞典』, 村上仁監訳, みすず書房, 1980年, を参照にした。

9) 城西人文研究第8号, 『シャルル・モーロンの「精神批評」(1)』ではこの *phantasme* を「空想」と訳しておいたが、その後、フロイトに関する著作を参照した結果、「幻想」という訳語の方がモーロンの意図に沿うのではないかと思い、以下、本文では「幻想」で統一することにした。

10) ジャック・ラカンについては *Ecrits*, I, II, III, seuil, 邦訳『エクリ』I, II, III, 弘文堂, および「現代思想」7月臨時増刊号, 1981年を参照にした。

11) 『ジャック・ラカンの現代性』, 宇波彰, 「現代思想」pp. 53—54.

「ポーの「盗まれた手紙」は、ラカンが特に重視する文学作品である。…

それは、『盗まれた手紙』が何よりもまず意味スルモノの優位と、《伝達すること》の重要性を語っているからである。ラカンは『盗まれた手紙』について、《だれひとりとして、手紙の言おうとしたことを気にも留めなかった》と書いている。

《手紙の言おうとしたこと》, つまり手紙の意味サレルモノがこの小説でまったく重要性を持たないわけではないが, それは問題の外に置かれている。重要なことは, 手紙が相手に届くということである…。

《言語は何かを意味する前に, 誰かに対して意味する》というのが, ラカンの基本的な立場である。…言語を意味伝達的手段とする通常の言語理論がここではまったく否定され, とにかく一方から他方への《伝達》が存在することだけが重要だと考えられるのである。」

- 12) *Des Métaphores obsédantes au Mythe personnel*, pp. 30—31.

“Si le lecteur est choqué par l’expression 《pensée inconsciente》, je le prie d’admettre que je nomme 《pensée》 l’acte mental par lequel des représentations quelconques sont comparées, reliées, groupées. Cet acte peut être inconscient et se distingue ainsi de la pensée proprement réflexive.”

- 13) *Le dernier Baudelaire*, pp. 19—20.

“Les rêves ou phantasmes préverbaux, qui constituent le produit normal de la pensée inconsciente et qui, … sont privés de toute expression propre (puisque la pensée consciente les commande en principe: parole, mimique, geste, action volontaires) cherchent ainsi une issue possible.”

- 14) *Des Métaphores obsédantes au Mythe personnel*, p. 195.

“L’imagination profonde n’assemble pas…des sensations, des souvenirs ou des idées à peine colorés de sentiments; elle ordonne des mouvements de désir ou de crainte.”

- 15) MAURON, *Phèdre*, José Corti, 1978, p. 45.

“au niveau du phantasme, une pensée n’est pas une relation abstraite, mais une image souvent composite, chargée de désir et de crainte.”

- 16) Gaston BACHELARD, *L’Air et les Songes*, José Corti, 1968, p. 53.

- 17) BACHELARD, *La Poétique de l’Espace*, P. U. F., 1970, p. 29.

“Il faut ajouter que l’inconscient est bien logé, heureusement logé. Il est logé dans l’espace de son bonheur. L’inconscient normal sait partout se mettre à l’aise.”

- 18) BACHELARD, *La Formation de l’Esprit scientifique*, Vrin, 1972.

- 19) *Des Métaphores obsédantes au Mythe personnel*, p. 28.

“le contenu manifeste du rêve n’est plus discerné de son contenu latent; le travail de rêve et ses processus précis ne sont pas considérés. L’inconscient dont il est question ne comporte ni mécanismes, ni instances; il n’a pas d’histoire et on le saisit aisément par simple introspection. A quel niveau

de la personnalité l'auteur opère-t-il donc ses analyses ? Certainement pas au niveau de l'inconscient scientifiquement défini."

- 20) *L'Air et les Songes*, p. 29.

"On doit sentir que la psychanalyse ne dit pas tout quand elle affirme le caractère voluptueux du vol onirique. Le vol onirique a besoin, comme tous les symboles psychogiques, d'une interprétation multiple: interprétation passionnelle, interprétation esthétisante, interprétation rationnelle et objective."

- 21) *La Poétique de l'Espace*, p. 12.

- 22) *L'Air et les Songes*, p. 107.

- 23) Ibid. p. 35.

- 24) Ibid. p. 38.

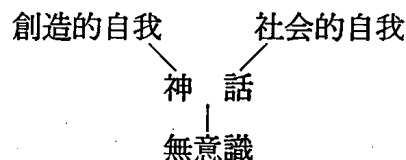
- 25) MAURON, *Psychocritique du Genre comique*, José Corti, 1970.

- 26) *Des Métaphores obsédantes au Mythe personnel*, p. 259.

"L'Œdipe correspond à un certain niveau du développement affectif normal, donc à une certaine structuration des fantaisies. Son rôle, et celui de ses dérivés, dans la littérature universelle et singulièrement dans les genres tragique et comique, ne me semble plus à démontrer."

- 27) *Psychocritique du Genre comique*, pp. 14—15.

- 28) *Des Métaphores obsédantes au Mythe personnel*, p. 230.



この「神話」とは個人的神話のことであり、またこの図式を本論(1)の81ページの図と比較するならば一目瞭然である。

- 29) *Le dernier Baudelaire*, p. 64.

- 30) *Des Métaphores obsédantes au Mythe personnel*, chapitre VI, および『精神分析用語辞典』, 「幻想」の項による。

- 31) フランスの精神分析学者のなかには「fantaisie」という単語をドイツ語の「phantasie」の訳語に意図的に充てている人たちがいる。例えば、モーロンがその著作のなかでときどき引用するダニエル・ラガッシュ—Daniel LAGACHE—である。このような事実を考え合わせると、モーロンの「fantaisie」がフロイトの幻想の概念をあらわしているといっても、あながち、まとはずれな訳語であるとは限らない。

- 32) *Des Métaphores obsédantes au Mythe personnel*, p. 107.

"le mot «fantaisie» doit être pris dans le sens de pensée primitive, ou de rêve, d'origine et de formation inconscientes, bien que pouvant affleurer à la

conscience.”

33) Ibid p. 108.

“La fantaisie exprime le désir, mais ne peut manquer d’exprimer aussi bientôt l’objet du désir. Elle est le premier carrefour d’échanges entre le sujet et l’objet, et ce carrefour deviendra le moi.”

34) 例えば、モーロンの作品のなかで「fantaisie imaginative」と「phantasme」とがまったく同じ意味に使用されながら併置されている個所がある。Ibid. p. 109.

“Nous parlons maintenant de fantaisies imaginatives inconscientes. C’est un pas nouveau. Mais quel rapport y a-t-il entre un réseau d’association observé et un phantasme supposé ?”

「今や私たちは無意識的な想像的幻想について語ろう。それは新たな一歩である。だが、観察された連想網と仮定された幻想とのあいだに、どのような関係があるのだろうか。」

35) *Psychocritique du Genre comique*, p. 15.

“Le ou les phantasmes dont ils forment apparemment le contenu manifeste ne nous présentent-ils pas la face consciente, déjà élaborée, de phantasmes inconscientes dont le contenu latent demeure à déterminer ?”

本論の(1)と(2)における引用参考文献

- Charles MAURON : *Des Métaphores obsédantes au Mythe personnel*, José Corti, 1976.
 : *Psychocritique du Genre Comique*, José Corti, 1970.
 : *L’Inconscient dans l’œuvre et la vie de Racine*, José Corti, 1969.
 : *Le dernier Baudelaire*, José Corti, 1966.
 : *Phèdre*, José Corti, 1978.
 : *Introduction de la psychanalyse de Mallarmé*, La Baconnière, Neuchatel, 1968.
- Gaston BACHELARD : *La Poétique de l’Espace*, P. U. F., 1970. (邦訳『空間の詩学』, 岩村行雄訳, 思潮社)
 : *L’Air et les Songes*, José Corti, 1968. (邦訳『空と夢』, 宇佐見英治訳, 法政大学出版局)
 : *La Formation de l’Esprit scientifique*, Vrin, 1972. (邦訳『科学的精神の形成』, 及川馥・小井戸光彦訳, 国文社)
- Morice BLANCHOT : *Vaste comme la Nuit*, La N. R. F., avril, 1959.

- Anne CLANCIER : *La Psychocritique*, dans CIRCE 1, Cahier du Centre de Recherche sur l'Imaginaire, Lettres Modernes, 1969.
- Manuel de DIEGUEZ : *L'Ecrivain et son Langage*, Gallimard, 1960. (邦訳『批評家とその言語』, 及川馥訳, 審美社)
- Jacques LACAN : *Ecrits* I, II, III, seuil, (邦訳『エクリ』 I, II, III, 佐々木孝次他訳, 弘文堂)
: *Le Séminaire*, seuil, livre I (1975), livre XI (1973).
- Raymond PICARD : *Nouvelle Critique ou Nouvelle imposture?* J.-J. Pauvert, 1965.
- Georges POULET : *Les Chemins actuels de la Critique*, 10/18, 1968.
- 江口雄輔 : 『Ch. Mauron のボードレール論』, 独協大学フランス文化研究第10号, 昭和54年
- フロイト : 「フロイト著作集」, 人文書院
「世界名詩集」14, 平凡社, 昭和44年
『フランス文学史』, 白水社, 1979年
「現代思想」, 青土社, 1981年7月臨時増刊号
『精神分析用語辞典』, みすず書房, 1980年